

(1) 単元名： 明治維新 ～ 大政奉還 ～

(2) 本時の目標： 改革の特色が分かる

すばらしい授業公開になった。新年度始まったばかりである。新しい先生方にとって一番授業を見たいのはこの時期ではないだろうか？校長先生の依頼に応ずる形で渡慶次先生が授業を公開した。特に新任で赴任された先生方の授業を見る目が輝いていた。学び合っている授業の風景をイメージから事実置き換えることができたのではないだろうか。さらに、授業後の研究協議がすばらしかった。まさにケースメソッドである。

村内の小学校（北国小・辺土名小）でもすでに、新任の先生方に見せ合う授業公開がすまされている。村内の各学校の取り組みに感謝である。教師の仲間の不安をやわらげてくれる同僚性の高まりに素直に感謝！

本日のシートは、国頭中学校のリフレクションの様子から記していきたい。

【 研究協議会 】



授業者の渡慶次先生  
「学び」3年目に入る。  
初めての先生方にとって  
最高の授業を提供してく  
れた。

授業後すぐに協議会が開かれた。(多目室)



写真①

1年目の先生、2年目の先生、初めての先生。様々の立場から語られる。びっくりしたのは、初めての先生方でも思ったより「学び」について語られていたことだった。写真①、佐藤先生が細かい視点で「学び」や生徒の様子を語る。さすがである。他の先生方の視線を見てほしい、「聴き合う」である。「身構えず、やわらかく、しっとり」と教師の本音が語られる。「学び」の授業スタイルが、教室の子ども達によって引き継がれていることを

確信した。今日までの国頭中学校の先生方のがんばりである。今年3年目、教師互いの「学び合う授業」のつながりを創りたい。「見て、まねて、だまされたと思ってやっごらん！」校長先生の言葉である。この言葉の後ろに隠れている校長先生の「心」をみつめてほしい。

【校長室でリフレクション】



写真②

校長自ら、先生方を校長室に招き語る。「学びの共同体」を掲げ3年目である。語る言葉もシビアになる。

- ・ロッカー、棚、机の位置（上・横・隙間）を気かけよう。
- ・教卓を取っ払い黒板前面を開く。（コの字の意義）
- ・教師はたち歩かない。教師は座って全体をしっかりと見渡せ。ケアが必要な生徒にだけ関わる。
- ・授業導入の心がけ、7分以内に本課題へおろす。

多くを語る校長の熱意、私も始めてこれほど語る神元校長先生を拝見しました。写真③④。



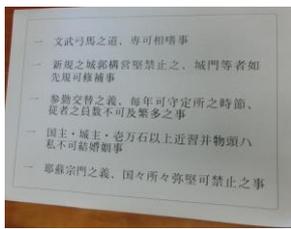
写真③



写真④

協議会終了後、校長室にて授業のスライド写真を見ながらの校長先生のリフレクションである。写真②、ここでも先生方の視線が熱い。

【共有課題】 「武家諸法度」をグループで解読する。



【ケアする】



「なにこれ〜」「意味分から〜ん」すばらしい課題が提供された。誰一人全文を解読することはできない。「学び合う」必然性が生まれる。一人ひとりのちょっとした気づきをグループで共有し、「感」で資料文を解読していく。必死である。すでに「もがき」がうかがえる、つまり夢中になって「訊き合っ」ている。他者の考えに自己の考えを重ねどんどん「学び」の思考が深まっていく。最後まで全文解読までは至らなかった。全然平気である。この生徒達の「分かろうとした」プロセスの中で確実に自己の高まりを感じた。…できた、できなかったを問わない！

仲間との対話に入れない気にかけて視線は送っているが、対話に入れない。ケアが必要である。仲間につきなく教師の行為が必要である。指導でなくケア！

【ジャンプ課題】 「五箇条の御誓文」の原文の解読。



さらに、「なにこれ」「うそ〜」この言葉が「学び合い」を加速させる。漢字の字体を読み取るにも必死である。教師はテキストを2段階のレベル10と8を準備した。身を乗り出し、身を寄せ合い語る必然性が生まれる。ちょっとした気づきも共有する。辞書が使われたグループもあった。仲間と「分かり合おう」とするこの行為を見て一番に「安心」するのは誰？

【つながる】



共有課題のとき対話に入れなかったA君の手がうごいた。途中、仲間たちはちょっとした会話をA君に投げかけて気にかけていたが上手くいかなかった。しかし、ジャンプの課題でつながった。うれしい！

【授業終末】 最後に教科書で確認



「なんだ、そう言うことだったのか！」「ほら、やっぱり！」うれしい声がいっぱい聞こえた。授業者の授業デザインは、資料を使って、前半に「学び合い」のもがきを設定し、散々思考させた後に、教科書での確認であった。教室の仲間達の心のもがきが「ストーン」と落ちた瞬間だった。ここで確認しておきたいことは、教科書が確認のためのテキストとして最後に使われたことである。「教科書を教えるが授業じゃないんだよ。教科書はあくまで授業づくりのための、材料にしかならないんだよ。」教科書や、指導書の方法論に縛られない授業デザインを心がけてほしい。そういう意味で本日の渡慶次先生の授業公開は多くの示唆を与えてくれた。「学びの共同体」多くの先生方は、指導要領の内容を踏まえていればいい、あるいは、学年の発達段階の域を超えてもいいと話されている。「『対話』と『協同』による自己の変容を図る。」である。

渡慶次先生ありがとうございました。すばらしい公開授業でした。始めて学びの授業を参観した先生方の「もやもや」がストーンと落ちたのではないのでしょうか。しかし、本日の先生方の授業を見る視線、協議会での視線には熱いものを感じました。関心・感心の高まりを感じずにはいられない雰囲気でした。

さらに、校長先生の熱意が半端じゃないことをひしひしと感じました。授業リフレクションでは、実に的確なアドバイスで私が話したいことのほとんどが先に語られてしまったと言う感じでした。

- ▲「聴き合う」教師の言葉と生徒の言葉が重なると、だんだん声が大きくなりテンションも上がり「聴き合い」が「言い合い」になってしまいます。気をつけましょう。まずは、「聴く」姿勢を教師が徹底して見せることです。不思議なことにその行為は確実に生徒に移るのです。
- ▲生徒への関わりは、「ケア」を要する生徒に限定しよう。教師が動き回ると、教師への依存が発生し、自分達で解決しようとしなくなります。椅子に座ってじっと生徒を見守る。「学び合っている」グループにはかかわるな！
- ▲時間内という縛りからの開放。時間設定による学び合いの制限はやめよう。

